

HIV 及び結核のための多言語通訳の育成とその普及に関する検討

「外国人に対するH I V検査と医療サービスへのアクセス向上に関する研究」班

研究協力者 Tran Thi Hue エイズ予防財団リサーチレジデント

研究代表者 北島 勉 杏林大学総合政策学部教授

研究分担者 沢田 貴志 神奈川県勤労者医療生活協同組相港町診療所所長

研究分担者 宮首弘子 杏林大学総合政策学部教授

研究要旨

日本では、2013年以降、国内で報告される外国人のH I V陽性数は増加傾向にあり、その国籍も多様化している。この結果、必要とされる通訳の言語数も増えており、通訳人材確保が困難となっている。また、結核についても、外国人の報告が増加しており、出身地もHIV陽性者の出身地と重複する傾向がみられる。

上記の状況において、当研究班では、2016年から多様な言語の外国人の受検や受診に対応できる通訳の育成を目指し、多言語の通訳の研修を実施した。昨年度までは、関東、関西及びその周辺の自治体や国際交流協会などで医療通訳を対象にH I V・結核に対応する感染症医療通訳の育成研修を行った。2020年度には、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行が始まったため、初めてオンラインで感染症医療通訳の育成研修を実施し、その効果について検討を行った。

2020年08月と2021年01月に2回研修を実施し、合計で95人が参加した。参加者の属性は主に日本出身者、女性と大卒以上の学歴の参加者が多かった。中国語と英語の参加者が多く、他に少数ずつベトナム語、ネパール語、スペイン語、ポルトガル語の7言語の参加者があった。研修効果については、両研修ともすべての設問で研修終了後の平均正答率が著しく上昇した。特に、H I V・結核に関する重要な内容について正答率が61%から93.7%まで得られた。また、認識・行動意志についてもすべての設問で改善が見られた。通訳の必要性が今後高まることが予想されているベトナム語・ネパール語などの参加者はまだ少なく、今後のH I Vの通訳体制を普及するためにはこうした人材の確保の戦略が必要である。

A. 研究目的

この数年、日本国内で報告される外国人のH I V陽性者数は増加傾向となっており、出身国も多様化しているのは課題となっている。エイズ動向委員会の報告では、2013年以降外国人のH I V陽性報告数が増加しており、2017年には152件であり、2013年（110件）より38%増加し、この5年間のピークとなった。また、国籍別動向をみると、従来H I Vが判明した外国人の中で、タイ、ブラジルなどの特定の国の出身者が多かったが、近年、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナムなどの東南アジアと太平洋地域の増加が目立っている

（沢田ら、2016）。この背景には、2019年04月からの外国人材の受入れ拡大に伴い、若い技能実習生などの増加があり、外国人のH I V報告数も増加し続けることが予測される。

一方で、先行研究では、日本語と英語ともに不自由な外国人の医療アクセスが遅れていることが指摘されている。これまで、外国人への相談対応を行うNPOや外国人のボランティア団体、エイズ予防財団、地方自治体が連携し、通訳育成研修や拠点病院への研修事業を行っていたが、主に英語、タイ語、ポルトガル語、スペイン語、中国語などの特定の言語に集中

していた。今後、フィリピン語、インドネシア語、ベトナム語などの高いニーズがある言語も通訳体制の構築も重要である。

そこで、当研究班は、2016年度から、関東及び周辺地域で活動するNPOや国際交流協会の担当者を対象に、HIV・結核に対応する医療通訳のための育成研修を実施した。本年度は、COVID-19の流行が始まったため、同様の研修をオンラインで行った。

B. 研究方法

2020年08月と2021年01月に、医療通訳派遣事業を行っているNPO法人チャームとNPO法人多言語社会リソースかながわ(MICかながわ)依頼し、感染症(HIV・結核)への派遣を任務とする医療通訳の研修を企画した。

研修内容は昨年とほぼ同様とし、第1回を結核・HIVに関する知識と保健所の役割などの知識の取得を目的とした座学での学習であった。第2回は通訳技術の習得を主な目的とし、ロールプレイによる実技の指導を中心とした研修であった。

本研究は、このうち知識の学習を目指した第1回の研修によって、結核・HIVについての知識がどのくらい定着したかについての検討を行っている。

研修に参加した95人に対して、無記名の自記式質問票を研修の前後で行った。内容は、参加者のプロフィール、HIVへの知識、結核の知識、HIVや結核への態度についてであり、研修の前後でそれぞれの正答率を比較した。95人の内、研究協力に同意を得られた80人について解析をした。

倫理面への配慮)

調査の参加は任意的であることを質問票に記載し、参加を希望しない場合はその旨記載する欄を設けることで調査参加の同意を得た。

C. 研究結果

1. 研修参加者のプロフィール

2020年8月と2021年01月に行った研修に対して、7言語95人の研修参加者が得られており、言語毎のプロフィールを以下に示す。

表1. 研修参加者の担当言語毎の人数

担当言語	人数	担当言語	人数
中国語	28	スペイン語	7
英語	34	ポルトガル語	4
ベトナム語	8	その他	7
ネパール語	7		

研修参加者は、女性が88人と全体の92.6%を占め、主な生育地が日本の人が64人と全体の67.4%を占めた。年齢は20歳台から60歳以上と幅広く分布していた。最終学歴は大卒(62人)と大学院卒(15人)で合わせて約80%を占めた。

表2. 通訳研修参加者のプロフィール

		人 数	%
性別	女	88	92.6
	男	7	7.4
生育地	主に日本	64	67.4
	主に外国	31	32.6
年齢	20-29	8	8.4
	30-39	13	13.7
	40-49	19	20.0
	50-59	31	32.6
	60歳以上	24	25.2
学歴	高卒	4	4.2
	大卒	62	65.2
	大学院卒	15	15.8
	その他(短大)	14	14.7

過去の医療通訳経験は、「経験なし」が30人であったが、「経験5年未満」45人と「経験5年~10年以下」10人を合わせて57.8%を占めた。中には、結核の通訳を経験したことのある参加者14人、HIV通訳を経験した参加者10人

が少なからず含まれていた。

表3. 参加者の医療通訳経験

		人数	%
活動期間	なし	30	31.6
	1年～5年未満	45	47.3
	5年～10年未満	10	10.5
	10年以上	10	10.5
結核通訳経験	あり	14	14.7
	無し	81	85.3
HIV通訳経験	あり	10	10.5
	無し	85	89.4

2. 結核とHIVに対する知識と研修の効果

結核とHIVの通訳を行う上で特に重要な知識について研修で情報提供を行った。これらの知識がどの程度習得されているを評価するために、研修の前後での正答率の比較を行った。全設問の平均正答率が63.8%から86.4%へと大幅に改善しており、特に結核の薬剤数や診断に有用な検査やHIVの治療予後等といった重要な内容について37%から74.4%と61%から93.4%の正答が得られるようになった。一方、研修後の正答率が80%を超えなかったHAARTの薬剤数の設問については、ARTで最低限必要な薬剤の数を4剤と答えたりするなど、誤答を選択する回答者が多かった。

表4「結核・HIVの知識」の評価結果

	研修前 (N=95)		研修後 (N=91)	
	正答数 (率)		正答数 (率)	
結核				
標準治療の薬剤数	37	38.9	68	74.7
感染性のある結核	78	82.1	82	90.1

特徴的な病状	80	84.2	82	90.1
主な副作用の知識	79	83.1	82	90.1
診断に有用な検査	42	44.2	74	81.3
HIV				
HIVの感染経路	91	95.7	87	95.6
AIDSとCD4値	50	52.6	83	91.2
主な日和見感染症	51	53.6	76	83.5
ARTの薬剤数	41	43.1	67	73.6
HIVの治療予後	58	61.0	85	93.4

3. 結核・HIVへの認識・行動意志に関する設問

結核やHIVに対して恐怖感がないか、結核患者・エイズ患者への支持的態度を持っているかに関する質問を行った。

今度の研修参加者が、もともと感染症通訳として患者支援を行う意志がある人々であるため、結核やHIVに対する恐怖感・不安感は元から少なく、支持的な行動意志も研修前から高かった。研修後には、結核やエイズに対する不安感はさらに減少し、顕著な差ではないものの支持的な態度の増加が見られた。

表5 結核・HIVへの認識・行動意志

	前	後
結核はとても怖い病気	26	17
AIDSを友人とよく話せる	22	25
咳や痰が続いたら受診を勧める	47	58
同僚がエイズで服薬でも不安はない	18	30
結核の友人通訳してあげる	15	27
エイズを通訳依頼引き受ける	29	42

D. 考察

本年度の研修の課題の一つとして、オンラインの研修では感染症分野で活動する通訳人材が集まれるかどうかであった。しかし、結果として95人と多数な言語の研修参加者が得られ、既にH I Vと結核の通訳を経験している参加者がそれぞれ10.5%、14.7%であった。このことは、全国でH I V・結核患者に占める外国人の割合が増加している中で通訳の供給元としてN P Oの重要な役割が確認できた。

言語の分布では、昨年度と同様、中国語と英語などのように学習者が多い言語は多数の参加があったが、近年ニーズが高まっているベトナム語、ネパール語などのアジア諸国の通訳者の参加はまだ限定的であった。このことは今後の人材確保の面で大きな課題である。

E. 結論

外国人のH I V・結核に対応する医療通訳の育成のために研修を実施した。多数の参加者があり、知識の習得に関して、研修の効果も

十分認められた。一方で、言語によって、人材の確保に困難があることが示唆され、今後の課題を残した。

参考文献

- 1) 厚生労働省エイズ動向委員会. 平成30年エイズ動向委員会報告、2018.
- 2) 沢田貴志、山本裕子、樽井正義、仲尾唯治. エイズ診療拠点病院全国調査から見た外国人の受療動向と診療体制に関する検討. 日本エイズ学会誌、18:230-239, 2016.

F. 健康危険情報

G. 研究発表

H. 知的財産権の出願・登録情報

1. 特許取得
2. 実用新案登録
3. その他